

デフォンテーヌ作『娘兵士』（1794年）に見る フランス革命期の演劇の男装のヒロイン像

中山 智子

〈Résumé〉

Dans son étude sur le répertoire des Spectacles à Paris pendant la Révolution, André Tissier écrit les phrases suivantes : « Les œuvres les plus jouées ne sont pas celles des auteurs « politiques ». Les auteurs les plus joués sont des auteurs de la seconde partie du XVIII^e siècle, et, parmi ceux de la fin du siècle, des « amuseurs » sans prétention politique et philosophique. » Desfontaines, auteur de la pièce *La Fille soldat*, est justement l'un de ces « amuseurs » qui ravissaient le public parisien. Entre septembre 1792 et octobre 1795, (c'est-à-dire dans la période qui va de la proclamation de la République à la fin de la Convention nationale), Desfontaines fut le deuxième auteur le plus joué, avec 1070 représentations, après Radet (1332 repr.)

François-Georges Fouques Deshayes dit *Desfontaines* (1733-25 novembre 1825) était un auteur très prolifique, avec à son actif environ soixante-dix pièces, seul ou en collaboration, la plupart mêlées de vaudevilles. Son ambition première était de divertir le grand public de l'époque.

L'objet de notre article n'est pas de réhabiliter cet auteur aujourd'hui totalement oublié, ni de remettre à l'honneur la qualité littéraire de sa plume. Mais, à partir d'une de ses pièces, d'examiner comment le contexte social de l'époque révolutionnaire a pu influencer un théâtre conçu au départ comme un pur divertissement.

フランス革命期のパリでのスペクタクルのレパートリーについての研究の中で、アンドレ・ティシエは次のように述べている。

最も上演回数の多い作品は「政治的」作家の作品ではない。最も上演回数の多い作家は18世紀後半の作家たちであり、18世紀末の作家の中では、政治的・哲学的意図を持たない「娯楽屋」(amuseurs)なのだ¹⁾。

本稿で研究対象として選んだ『娘兵士』(*La Fille soldat*)の作者デフォンテーヌは、ティシエが言う「娯楽屋」であり、革命期にパリの大衆を楽しませた作家たちの1人である。共和国が宣言された1792年9月から国民公会の終わりの1795年10月までの期間、デフォンテーヌは上演回数の多さで2番目に位置する人気作家であった。1位のラデ(Radet)は1,332回、2位のデ

フォンテーヌは1,070回である²⁾。36ヶ月間で1,070回の公演を月ごとに換算すれば、1月に30回の公演回数となる。同期間、17、18世紀から不動の人気を保っていたモリエールは967回、ヴォルテールは393回、マリヴォーは322回³⁾の公演回数であったことを考えれば、デフォンテーヌたち「娯楽屋」の人気の高さがうかがえる。

デフォンテーヌ (François-Georges Fouques Deshayes dit Desfontaines, 1733-1825) は非常に多作の作家であり、単独であるいは共作で70本もの戯曲を書いている。その多くが、当時流行した歌を替え歌として用いたヴォードヴィルが挿入された形式である。デフォンテーヌは当時の大衆を楽しませる目的で戯曲を書くことに専念した作家である。

本論の目的は、今日ではフランスでも忘れ去られたこの作家の名誉回復をすることでもなく、この作品の文学的価値を再評価するものでもない。しかしデフォンテーヌの戯曲を例に、当時の社会的状況がどのように大衆向けの演劇に影響を与えたかを検証するものである。

『娘兵士』は1幕散文劇で、ヴォードヴィルが挿入されている。作者デフォンテーヌはこの戯曲に「歴史的事柄」(fait historique)というジャンルを割り当てている。初演は1794年12月13日、ヴォードヴィル座 (Théâtre du Vaudeville) で行われた。初演の年に43回の公演を数える成功を収めている。

ヴォードヴィル座は1792年創設されたばかりの新しい劇場であった。ヴォードヴィル (vaudeville) とは、もともと、18世紀前半にパリの縁日芝居で人気を博した、芝居の中に既存の歌のメロディを取り込み、新しい歌詞をつけて上演したスペクタクルのことである。ヴォードヴィル座の創設と共にヴォードヴィル形式の芝居の人气が再燃し、以降も第一帝政、王政復古時代を通して非常に流行した。デフォンテーヌはヴォードヴィル座に作品を提供した主要な作者の一人であった。

まず戯曲のあらすじを確認しておく。舞台設定は、国境近くの村で、フランス軍の連隊の駐留するキャンプである。ヒロインはジュリーという名だが、志願兵として戦争に出征するため家出をし、男装してヴィクトールと名乗っている。伍長ジュリアンは、ヴィクトールが女性ではないかと思っており、ひそかにヴィクトールを女性として慕っている。フランス軍はオーストリア軍と対戦中であり、敵軍の来襲にヴィクトールは兵士としての勇敢さを見せる。しかし、自分の父が行方不明となった娘を心配するあまり病に倒れたことを告げられたヒロインは、動揺を抑えきれず、ついに自分の正体を仲間たちに証してしまう。ジュリーは連隊を去り家族の元へ帰ることを決意する。

男装のヒロインは文学的トポスのひとつであり、小説や戯曲に数多くの例が見られる。とりわけ17世紀、18世紀前半に流行した。しかし、18世紀後半にはこの流行は一旦終焉を迎える。同時期に流行した市民劇 (drame bourgeois) はそれ以前の演劇よりも日常的な主題と現実的な表現方法を選択したので、ヒロインが衣装で男性に扮し、男として振る舞うことを誰も不思議に思わないような筋立てはあまりにも小説的 (ロマネスク) だと思われたのだろう。しかし、男装のヒロインは1780年代、再びフランスの舞台に戻って来る。とりわけ、女兵士として。デフォン

テーヌの『娘兵士』は、この時代の兵士に扮するヒロインを描いた作品群の一例である。

筆者はこれまで男装のヒロインを持つ1680年から1762年の間にパリで上演された戯曲を調べたが⁴⁾、それらの戯曲には兵士への変装はあっても、いわば仮装としての兵士への変装であり、実際に戦場へ赴き、戦う兵士としての変装ではなかった。それに対して、1780年代から顕著になるのは、戦争に参加するために兵士に変装するヒロインたちである。

これまでの研究で分析したフランス革命期以前の演劇における男装のヒロインと、デフォンテーヌの芝居のヒロインとの違いは、何よりも男装の動機である。筆者の知る限り、革命期以前には、ヒロインは実際に兵士として戦うために男装することはなかった。革命期以前の劇でヒロインが兵士に扮するとしても、家族に強制された結婚から逃れたり、恋人の自分への愛情を試すためであって、戦地へ赴くためではない。同じデフォンテーヌの作品であっても、革命勃発以前の1781年に書かれた『軽騎兵イザベル』(*Isabelle hussard*)では、ヒロインは恋人の誠実さを確認する手段として軽騎兵に変装するのである。しかし、『娘兵士』のヒロインは次のように変装の動機を説明する。

VICTOR *seul*.

[...] Quoique femme, voilà deux ans que j'ai l'honneur de faire la guerre, que j'ai l'adresse de dérober mon secret à tous mes camarades, et sous la tente, cela n'est pas facile. [...] Tous les jours, je me reproche le chagrin que je lui [=le père de Victor] cause ; mais c'est à lui que je dois le patriotisme qui m'anime, et si je suis tuée, il me regrettera ; si j'en échappe, il me pardonnera.... (sc. III)⁵⁾

ヴィクトール (独白)

(中略) 女だてらに、戦う名誉を得て、兵士仲間から私の秘密を巧みに隠して2年になるが、同じtentでは簡単なことではなかった。(中略) 毎日、父に私が与えた悲しみを思い自分を責めている。でも私を駆り立てる愛国心を私に与えたのは父だ。もし私が殺されれば、父は私を惜しむだろう。もし私が逃れれば、父は許してくれるだろう……

ヴィクトールは変装の動機を明白に述べている。それは愛国心だ。言葉だけでなく、行動においてもヴィクトールの勇敢さは連隊の他の兵士たちよりも抜きん出ている。ヴィクトールが新兵たちに剣術を指南する場面では、ヴィクトールは銃剣について「勇敢な者の好む武器だ、我々の仲間たちも、そして私も」(*c'est l'arme favorite du courage, celle de nos camarades, et je suis de leur avis.*)⁶⁾と述べ、その理由は銃よりも確実に敵を狙えるからであり、「銃剣のおかげで、俺は敗者に死を与えるのだ」(*A l'aide de la bayonnette / Du vaincu je règle le sort*)⁷⁾とまで言っている。

また、連隊がオーストリア軍の奇襲を受けた時のヴィクトールの無鉄砲とも言える行動を、

ジュリアンは次のように語る：

JULIEN. Un soldat ennemi nous enlève notre drapeau, et s'enfuit à travers le bois; Victor le voit, se précipite sur ses pas . . . Je veux le suivre, le passage me devient impossible, et Victor entraîné par l'excès de sa valeur, le malheureux Victor aura payé de son sang ! . . . (sc. XIII)⁸⁾

（ジュリアン 敵兵が我が国の旗を奪い、林を抜けて逃げていった。ヴィクトールがそいつを見て、後を追いかけたんだ……俺もヴィクトールの後を追おうとしたが、追跡できなくなった。ヴィクトールは自分の過剰な勇敢さに駆り立てられたんだ、ヴィクトールは自分の命を引き換えにして……）

しかし、ジュリアンの心配とは反対に、ヴィクトールは無事に帰還する。

SCENE XIV.

Les mêmes, VARIN.

VARIN, *accourant*. Victor, Victor . . .

JACQUELINE, JULIEN, AMBROISE. Victor !

VARIN. Avec le drapeau . . . grands et petits, jeunes et vieux, tout le monde le suit.

[. . .]

Sur l'air suivant [=Air : Le beau jour marqué pour la gloire] Victor arrive à la tête des soldats, avec le drapeau. Julien le presse d'un côté, Jacqueline de l'autre, le village le suit. (sc. XIV)⁹⁾

第14場

前場の登場人物とヴァラン

ヴァラン（駆けつけて）ヴィクトール、ヴィクトール……

ジャクリヌ、ジュリアン、アンブロワーズ ヴィクトール！

ヴァラン 旗を持って……大人も子どもも、古いも若きも、みんなあいつについて来た。

（中略）

以下の歌（「栄光に彩られた美しき日」）が歌われる中、ヴィクトールが旗を持ち、兵士たちを先頭で率いて現れる。ジュリアンは片側から、ジャクリヌはもう片側からヴィクトールに身を押し付ける。村中がヴィクトールに付き従う。

この場面で、兵士に扮した女性登場人物が真に英雄として扱われていることは明白である。このように女兵士の英雄的扱いは当時の政治的、社会的状況を鑑みれば興味深い。1791年にまず、

オランプ・ド・グージュ (Olympe de Gouge) やテロワーニュ・ド・メリクール (Théroigne de Méricourt) のようなフェミニストたちによって女性だけで構成された軍隊が要請された。彼女たちは、女性たちが愛国心を行動に移しうること、男性と同様に榮譽への権利を持つことを主張した。

ルネッサンスからフランス革命期までの異性装について研究したシルヴィー・スタンベルグは、著書の中で、男装し秘密裏に革命軍に参加した実在の女性たちの例を紹介している¹⁰⁾。戦争に参加するために男装した女性市民の数は当時の記録や研究によっても異なるが、スタンベルグは少なくとも革命期に50人の男装の女性兵士がいたと述べている。何人かの女兵士は戦場での功績を讃えられ、国民公会によって年金を支給された。しかし1793年春から、ベルギーでの3月18日のフランス軍の敗北に起因して、軍隊での女性の存在は悪く見られるようになり、1793年4月30日の政令により、「現在軍務についている女性は兵役から排除される」(11条)¹¹⁾と規定された。

興味深いことに、デフォンテーヌの戯曲は、女性を軍務から排除する政令の発令の後に書かれている。作者デフォンテーヌはこの戯曲を、ヒロインの兵士としての勇敢さの称揚で終えてはいない。祖国の敵に対し不屈の精神で立ち向かったヴィクトールは、しかし、父の愛を繊細に感じ取り、家族の元に帰るために連隊を離れることを決意するのだ。ヒロインが娘として家族への愛情を表明する場面に次いで、幕切れのヴォードヴィルでは、女性の母としての役割が賛美されるのだ。戯曲はヴィクトールとジュリアンのカップルの成立と、将来の祖国の兵士となる子ども——それも男児——の誕生への期待で幕切れを迎える。

VAUDEVILLE

[...]

AMBROISE, à *Victor*.

Fille soldat,

Doit à l'état

De marmots gentille milice ;

Faut d's enfans

Qui d'vienn' grands ;

N'y a su'terr' de trop qu'les méchans.

JAQUELINE, à *Ambroise*, avec *pudeur*.

L'ainé peut v'nir avant un an !

Tâche qu'ïr'ssemble à sa maman.

CHŒUR.

Chaque jour, chez l'amour,

Vous serez, etc.

Nous serons, etc.

FIN¹²⁾.

ヴォードヴィル

（中略）

アンプロワーズ（ヴィクトールに）娘兵士は／国家に与える義務がある／勇敢な義勇兵になる子どもたちを／立派な大人になる／子どもたちが必要だ／意地悪な人間たちがこの世には満ちているんだから。

ジャクリヌ（アンプロワーズに向かって、恥ずかしげに）長男が1年の内に誕生するかもしれない！ お母さんに似るようにしないとね。

コーラス 毎日、愛に包まれて、／あなた方は、等々／私たちは、等々。幕

『娘兵士』には、これまで検証したように、フランス革命期の愛国主義が色濃く反映されている。男装のヒロインという文学的トポスは、革命期にあって、実際の社会での女性の軍への参加を背景にし、以前の演劇にない現実性を帯びた。大衆演劇として、この作品は、女性の観客たちに対して市民としての愛国心を鼓舞する役割も担ったことだろう。一方で、女性の軍務への参加を禁ずる法令の発令後の作品であり、単純に戦うヒロインを称揚するだけでは終わることができなかった。デフォンテーヌは、幕切れで、良き娘、良き伴侶、良き母という、より伝統的な女性の役割を賞賛することで、現実社会における理想的な女性像を創り出しているのである。

註

本稿はJSPS 科研費 24720080 の助成を受けて行なわれた研究成果の一部である。

- 1) André Tissier, *Les Spectacles à Paris pendant la Révolution, répertoire analytique, chronologique et bibliographique, De la proclamation de la République à la fin de la Convention nationale (21 septembre 1792–26 octobre 1795)*, Droz, 2002, p. 524. なお、本稿のフランス語文献の日本語訳は全て拙訳である。
- 2) 同書, p. 523.
- 3) 同書。
- 4) NAKAYAMA Tomoko, *Jouer un autre sexe : le travestissement des femmes en homme dans le théâtre en France de 1681 à 1758*, thèse de doctorat, Université de Nantes, sous la direction de Françoise Rubellin, 2011. 同研究ではコメディ＝フランセーズ成立の1680年から、イタリア座とオペラ・コミックが合併した1762年までの期間のコメディ＝フランセーズ、新旧イタリア座、縁日芝居のレパトリーを対象に男装のヒロイン像を検証した。
- 5) François-Georges Desfontaines, *La Fille soldat*, Librairie au Théâtre du Vaudeville, 1794, p. 5-6. 以下、同書をDと略記する。
- 6) D, p. 8.
- 7) Ibid.
- 8) D, p. 36.
- 9) D, p. 36-37.
- 10) STEINBERG Sylvie, *La Confusion des sexes. Le travestissement de la Renaissance à la Révolution*, Fayard, 2001, p. 353.

11) 同書, p. 258.

12) D, p. 51-52.

